



## 羅針盤



大原 國章  
Kuniaki Ohara

虎の門病院, Visual Dermatology 編集委員長

### 「メラノーマのすべて②」執筆にあたって

昨年の9月号 (Vol.13, No.9, 2014) に引き続き、メラノーマのすべて②です。すべて、と銘打つ割には最新の遺伝子、染色体の話題や、分子標的薬などの治療が抜けていると叱られるかもしれません。それらは現在も進行中の研究や治療法であり、これから10年、20年経ってから評価が定まり、標準化されるでしょうが、この2015年という時点においてははまだ確立され、一般化されたとは言い難い気がします。手術にしても、拡大切除から小範囲・縮小手術に向かってきましたし、再建術についても進歩とその反省が並行しています。ダーモスコピーに関して、導入時期を経て、ようやく一般診療レベルにまで普及してきた感があります。時代とともに、進化・流動し続けるのが世の習いでしょう。

もっと正直に言うと、筆者は“生ける伝説”から“歩く化石”になりつつあり、学問の進歩についていけないのが実情です。そのような自分ができることは何か、“虎は死して皮を残す”ように、今までの経験を語り伝えること、それを将来の診療に役立ててもらうことが役目と考えています。臨床医にできること、あるいは臨床医にしかできないことは何か、それはやはり疾病の臨床像の観察であり、臨床から考える病理像

であり、皮膚科医によって行われる手術術式でしょうし、それらはいつの時代にも普遍的、不変だと思っています。

そこで今回は、外陰や手、爪といったやや特殊な部位の症例を選んでみました。そして手術方法についても、自身の過去を振り返りつつ、将来への提言につなげるべく、踵の再建、爪の手術法を取り上げました。爪の手術については過去に簡単に記載したことはあったのですが十分ではなく<sup>1)</sup>、手術のキーポイント・コツが理解されていないことが判ったので、あらためて術中写真を撮り直しました。踵については、試行錯誤を経て振り出しに戻ったともいえますが、縮小手術の概念による見直しが追加された結果です。

なお、前回に引き続きまたも宣伝めきますが、5月末の日本皮膚科学会総会に向けて、『大原アトラス2 皮膚付属器腫瘍』を刊行予定です。遺跡巡り、化石発掘の旅にお越しく下さい。思わぬお宝を見つけられるかもしれません。

#### 文献

- 1) 大原國章：悪性黒色腫原発巣の外科的療法—原則と部位別実技。悪性黒色腫の診断・治療指針（斎田俊明・山本明史 編），金原出版，東京，p. 79-92, 2001